

Title	<書評>根津由喜夫著 『ビザンツ貴族と皇帝政権：コムネノス朝支配体制の成立過程』
Author(s)	井上, 浩一
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (2012), 95(5): 787-793
Issue Date	2012-09-30
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_95_787
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

根津由喜夫著

『ビザンツ貴族と皇帝政権』

——コムネノス朝支配体制の成立過程——

はじめに
井上浩一

本書は、日本のビザンツ史学にとつてはもちろん、国際的にも、
ても画期的な業績である。ただし、その真価を理解するためには、
十一世紀ビザンツ政治史の史料状況や研究史に関する知識を必要
とする。長くビザンツ史を研究してきた者として、本書の意義を
広く伝えるべく筆をとつた。

本書の構成と内容

本書は、ビザンツ帝国において十一世紀の半ばから続いた混乱
が、アレクシオス一世（在位一〇八一—一一一八）のもとで收拾
されるに至る政治過程を考察したものである。

序章、一、二章は、序論というべき部分で、課題と方法として、
個人の官職歴や親族関係を網羅的に調べ上げるプロソポグラフ
イー研究の成果を活用し、支配エリート層の人的関係の視点から
政治過程のメカニズムを説明することが述べられる。考察の中心
は軍事貴族と呼ばれる人々である。かつての「ビザンツ封建制
論」において、帝国の軍事官職に就く一方、地方に所領をもつ領

主階級と規定された軍事貴族を、著者は農村社会に関する史料の
不足を理由に、領主としての側面は捨象し、帝国軍団の指揮権を
通じて成長した門閥貴族と捉えなおす。彼らを階級として一括す
るのではなく、プロソポグラフィーを駆使して、生きた人間の思
いや行動がみえる政治史をめざしているといえよう。

もつとも地方社会に目が向けられていないわけではない。著者
は、軍事貴族が地域ごとに縁戚関係を結び、地域門閥を形成した
ことを強調する。その一方で、十一世紀の動乱において首都の勢
力、とりわけ教会・総主教が大きな役割を果たしたことに注目
している。こうして帝国全域を視野に入れた政治史が構想される
のである。

三章以下一〇章に至る各章は、ほぼ皇帝を単位として政治過程
を順次考察してゆく。第三章はトルニキオスの乱（一〇四七年）
とコムネノスの乱（一〇五七年）を比較している。著者はふたつ
の反乱の成否を、将軍と軍団兵士の信頼関係——地域における軍
事貴族の成長の要因——と首都勢力の動向に求めている。

イサキオス一世（一〇五七—一〇五九）、コンスタンティノス十世
（一〇五九—一〇六七）の時代を扱った第四章は本書の方法論がよく
現われている。両帝の政権を構成していた人物の網羅的な調査を
もとに、統治活動・政治過程を分析してゆくという手法である。
対照的なふたりの皇帝の時代を、転換期十一世紀のとくに重要な
転換点と捉えている。

第五章はマンツィケルトの戦いに至るロマノス四世時代（一〇
六八—一〇七二）が扱われる。マンツィケルトの敗因は、一般にはテ
マ制度の解体に求められるのに対して、著者はむしろ宮廷内の党

派対立に注目している。ここでも人的関係を軸に政治史を論じるという視角が貫かれている。

第六章は、ミカエル七世（一〇七一〜七八）のもとの小アジアの喪失が述べられる。ブラカミオスによる独立政権の形成を地域社会の状況から捉えた点や、アレクシオス・コムネノスによるルーセル反乱の鎮圧が、地域の防衛システムを破壊し、トルコ人の侵入を招いたという考察は、従来のビザンツ政治史が中央の視点から論じられていたのに対して斬新な指摘である。

第七章はニケフォロス三世（一〇七八〜八一）に対するふたつの反乱と、アレクシオス・コムネノスによる鎮圧、さらにそのアレクシオスの反乱から即位の過程を分析する。前章とは対照的に、アレクシオスによる帝国正規軍の掌握を新しい時代につながる動きと捉えている。

八章以下一〇章まではアレクシオス一世時代を扱う。第八章は軍司令官層の人的構成を分析し、政権の初期には有力軍事貴族が中心であったのに対して、治世後期には、皇帝従者を含む職業軍人の比重が増大したことが指摘される。

第九章は地方支配について考察する。コムネノス朝に結集した軍事貴族は宮廷貴族化し、地域とのつながりを失った。宮廷貴族と在地社会との間にあって地方支配を行なったのは貴族の家人・私的従者層であった。そのような家人層の自立が十二世紀末の帝国解体の要因であった。以上の指摘はコムネノス朝研究において画期的な意義をもつと思われる。

第一〇章はアレクシオス一世の治世末に生じた帝室内部の対立を扱っている。後継者問題をめぐる対立は、軍人である皇帝が政

権運営に主導権をもつ、その地位は父から息子へ世襲される、という政治路線の勝利というかたちで決着したとする。

著者は、本書が政治史の通史として読めるよう配慮したという。確かに、十一世紀後半の重要な事件が時系列的にもれなく扱われており、章から章への展開も滑らかで、複雑な政治過程がたどれるよう工夫されている。しかしながら、本書はやはり通史ではない。あくまでも高度な専門書である。私などは通史を書く際に、できるだけ人物を絞り込む、専門用語を避けることに留意しているが、著者は意識的に人名や官職名を列挙している（第五章註九）。通史としての読みやすさより、学問的な厳密さを優先させたためであろう。

史料の引用と読み解き

著者の史料に対する取り組みは、まさに博引傍証という言葉がぴったりする。史料分析はきわめて緻密で、本書の価値を一段と高めている。たとえば第七章では、勝算のない対トルコ作戦を皇帝から命じられ、窮地に立たされたアレクシオス・コムネノスが反乱に踏み切ったという通説——かつて私もそう主張した——に対して、アレクシオスは以前から反乱の機会を窺っていたと説き、それは「アンナ・コムネナ自身が証人である」（二五五頁）と述べる。この一文に私は違和感をもった。確かに、アレクシオスが早くから帝位を窺っていた可能性はある。反乱が相次いだ当時であって、かつて皇帝を出したこともあるコムネノス家が、機会があれば旗揚げするつもりだったことは十分想定できる。しかしながら、そのことをアンナが書くはずはないというのが私の理解で

あった。父アレクシオスの反乱に関する彼女の論調は、父は皇帝ニケフォロス三世に忠実で、その命令に従って、ブリュエンニオス反乱、続いてバシラキオス反乱の鎮圧にあたった。にもかかわらず、皇帝側近の妬みで毘にはめられ、我が身を守るためやむなく立ち上がった、というものだからである。ところが、著者が指し示す『アレクシアス』の頁を読み直すと、曖昧な表現ではあるが、確かにアンナはひとこと漏らしている。「これまで隠されていたことを明るみに出すことにした」。著者は「アンナ・コムネナの主観的な言説に十分、留意しつつ、このテクストを深く読み込むことで、その背後に隠れた真実に迫る」(二五二頁)と述べているが、まさに有言実行である。

窮地に立たされたアレクシオスが反乱を決意したという説に対して、著者の批判は続く。当時アレクシオスは、ふたつの反乱を鎮圧し、その兵力を配下に組み入れて強力な軍団を率いていた。充分な軍を与えられず対トルコ作戦に出陣するということはありえない。そもそも著者は付け加える。アレクシオスの苦境を伝える『歴史』の記事は、彼の反乱ではなく、歴史家ブリュエンニオスの祖父による反乱の前におかれている。

この補足には疑問がある。周知のように、ブリュエンニオス『歴史』はアレクシオスの反乱を記していない。その少し前まで途切れている。アレクシオスの苦境に触れているのは『歴史』の「序文」である。「序文」は後世の付加というのが通説で、本文にはないアレクシオスの反乱にも言及しているが、アドリアノーブルで皇帝宣言をしたなどと、事実と異なる記述もみられる。無批判に依拠できない史料である。確かに「序文」では、ブリュエ

ンニオス反乱の前にアレクシオスの苦境が記されているが、この反乱に際して、皇帝側がアレクシオスの敗北を企むことはありえない。鎮圧に派遣した將軍の敗北は皇帝自身の失脚を意味するからである。これに対して海峡の向こうのトルコ人との戦いなら、アレクシオスの敗北を期待することは充分ありうる。『アレクシアス』が伝える対トルコ作戦の命令から反乱への経過を、「序文」が説明するアレクシオスの苦境と結びつける解釈——かつて私はそうした——は、あながち無理ではないだろう。

アレクシオスの反乱と関係して、著者の誤解と思われる点を指摘しておく。ブリュエンニオス『歴史』はヨハネス二世時代(一一八〇—一一八七)の執筆であろう。著者は「アレクシオス一世下に執筆」(四章註八八)と述べているが、ブリュエンニオス本人の序文(後世の「序文」の末尾に収録)や『アレクシアス』の序文をみても、また皇帝の生涯を記すという著作の趣旨からも、アレクシオス没後とすべきである。少なくとも、没後二十年近く経った一一三七年になお執筆中であつたことは確かである。

ドゥーカス家に反乱参加を呼び掛けたアレクシオスの手紙に、素敵な晩餐をともしませんかとあつたのは、「冗談まじりに書かれていた」(二五八頁)のではなく、「生きた手紙」と考えるべきである。すなわち、手紙自体には差しさわりのないことを記し、肝心のことは伝令が口頭で伝える、という連絡方法である。反乱軍の集結地からモーロブドス(ドゥーカス家の所領)へ運ぶ途中で、手紙が皇帝側の手に落ちる危険性を考えての措置であつた。この措置から地方の状況が推測できる。

揚げ足取りのような指摘をしたのは、それくらいしか疑問点が

なかつたからである。アレクシオスの反乱についての著者の考察は、細部にわたるまで緻密な考察が加えられており、四十年近く前にこの反乱をテーマとして処女論文を書いた私としては、この間の研究の進展——著者の功績が大きい——に感慨を禁じえない。史料解釈についての疑問をいくつか追加する。ひとつは、アンナが父アレクシオス一世の跡目をめぐって弟ヨハネス（二世）と争った時、彼女を支援したもうひとりの弟アンドロニコスの死についてである。著者は、「アンナ・コムネナは、『アレクシアス』の中で、弟のアンドロニコスが父の死に先立って世を去っているかのように記述している」（三五六頁）と、アンナの誤解を指摘し、さらに踏み込んで、何事もなかつたかのように新皇帝ヨハネスに仕えている弟に対する彼女の意趣返しを、そこに読みとろうとする。このような大胆な解釈もまた本書の魅力のひとつである。その多くは史料・研究史への深い理解に支えられて説得的であるが、この場合は、アンナは弟の死を嘆いていると素直に読むべきであろう。

著者によれば、アンナがなぜ、弟が父の存命中に——帝位継承争いの前に——死去したかのように記述したのか、という問題を扱った研究は皆無であるという（二〇章註四八）。しかしそもそも、アレクシオス一世末のトルコ遠征で触れられる弟の死は、ロシア語訳註も指摘するように脱線、正確にいえば「先取り」という歴史叙述の方法であつて、この遠征で戦死したと言っているのではなく。この点 E. R. A. Sewter & P. Francopan の英訳が、Here he met his end, prematurely, としているのは正確ではない。原文は「早死にした」のみで、here に当たる言葉はない。アン

ドロニコスは一〇九一年生まれで一三〇一三六六年に死んだ。姉からみれば「早死」に違いあるまい。

もう一点。ニケフォロス・ボタネイアテスの反乱について論じる際に著者は、アタレイアテス『歴史』を引用し、都に近いルフィニアエの町ですら皇帝政府から見放されており、その失望と怒りが反乱軍に城門を開いた理由であるとする。しかしながら、「帝都と近接していたため、ミカエル〔七世〕の配慮や注意の下に置かれるということがなかったために、彼（ルフィニアテス）の歩兵部隊を市内に受け入れた」（二〇六頁）と著者が引用する『歴史』の一節は原文自体が曖昧で、それに応じて著者の訳文も不鮮明である。ミカエルへの言及とボタネイアテスへの言及は対になつているから、強いて訳せば、ルフィニアエの町はミカエルを見限つてボタネイアテスを受け入れた、といったところであろう。著者が「置かれる」と訳したのは「置く」という動詞の中動形（みずからを置く）である。それにしても「帝都と近接していたため」という原文は理解しがたい。著者のような読み方で、私の解釈でも、「近接していたにもかかわらず」とあるべきなのだが、続スキュリツェス以下の史書に並行記事がないので判断は難しい。いずれにせよこの文から、皇帝政府の実効支配は帝都の近郊にすら及んでいない、と結論するわけにはゆくまい。先に述べた「生きた手紙」の逸話も併せて考えるべきであろう。

循環論？——プロソボグラフィ―研究の射程

本書の魅力のひとつは、さまざまな史料・先行研究を引用しつつ、批判・考察を加えて結論を導くその切れ味にある。多くの推

論が展開されるが、大部分は説得的である。ここでは、プロソポグラフィという方法論に起因すると思われる問題点のみ指摘したい。

ブラカミオスの地域政權樹立を扱った第六章で、著者はブリュエンニオス『歴史』を引用し、アンテオキアにおける党派対立について論じている。対立を民族的なもの（V・ローラン）、階級的なもの（A・カジュダン）とみなす見解を否定し、「単純に、当時のミカエル七世政權を支持するか否かという政治路線上の問題であったと考えた方が分かりやすい」（一六八頁）と結論する。この議論は危うい。アンテオキアの党派対立は、一方に、中央から派遣された総督を支持する有力市民、他方はそれに対抗して総主教の周りに集まった集団なので、ミカエル七世政權を支持するか否かという対立があったことは自明であり、それを指摘しただけでは説明になっていないというべきであろう。なぜ一方はミカエルの政治路線を支持し、他方は反対したのか、選択しない判断の基準はどこにあったのか、先行学説が問題としたのはその点である。これに対して著者は、ニケフォリス（宰相）とアイミリアノス（アンテオキア総主教）の個人的な対立、すなわち人的関係という視点から説明する。ミカエル七世の政治路線については、やはり人的関係（官職・爵位の分配）の考察に重きがおかれ、政策（緊縮財政・増税）については付随的に述べられるのみである。

一〇七八年に反乱によって成立したニケフォロス三世ボタネイアテス政權についての説明も危うい。著者はまず、政權構成員の顔ぶれを一瞥するだけでその脆弱さは明らかであると述べる。新

政權には反乱参加者だけではなく、前政權の構成員も含まれており、ニケフォロス三世は前政權の支持者を新政權に参与させることを余儀なくされていた、というわけである。しかし、たとえばコンスタンティノス十世の政權は、帝權から他貴族を排除する方針をとったため、対外危機に直面した時、窮地に陥った。また、帝國の再建を果たすことになるアレクシオス一世のもとでも、当初、前皇帝の支持者が政權に加わっている。前政權の構成員が排除されなかったのは、新政權の弱さを示すのか、安定につながるのか、一概には言えないだろう。

議論を補強するために著者はニケフォロス三世の黄金印璽文書に言及する。政争に敗れた者の財産を没収しないという条項を引用して、「まるで目前に迫った自分たちの不幸な運命を緩和させたいという切羽詰まった思いが吐露されているかのようである」（二一六頁）と、巧みな表現で政權の不安定さを描き出す。

こうして政權構成員の分析と皇帝文書の文言から新政權の脆弱さを説いたあと、「実際、ニケフォロス三世政權は、……相次ぐ反乱に揺さぶられ」（同頁）とまとめられる。しかしこれは議論が逆さではないか。ニケフォロス三世は反乱が続くなか三年で失脚した、という事実が先にあって、それに応じてプロソポグラフィ研究の成果が読み込まれ、プロソポグラフィや勅令の語るところが政治過程によって確認できる、という循環論になっている。

旧政權支持者との融和、政争に破れた者の財産保全という、著者が指摘するふたつの事実、ニケフォロス三世政權の安定・不安定という問題に直接答えるものではない。私のみるところ、前

者は軍事貴族のあいだで次第に結合が進んでいること——著者が随所で指摘する地域ごとの結合を越えて中央のレヴェルでも——を語るものと理解すべきである。多数の貴族を結集したコムネロス王朝へ向けての歩みを読みとるべきであらう。後者は、全国土は皇帝の支配下にあり、すべての者は「皇帝の奴隸」という理念を放棄し、貴族の地域支配（土地所有・農民支配）を認めたものと理解したい。これまた、軍事貴族の階級的利害を保証する国家、貴族連合政権への一歩である。

軍事貴族が帝国軍団を掌握するメカニズムについて、著者は、ともに戦うことを通じて醸成される將軍と兵卒の連帯感に触れ、心性にまで踏み込んだ魅力的な考察をしている。しかしここでも議論は循環論に陥りかねない。信頼できる武装従者を伴って着任することに よつて帝国軍団を効果的に指揮できる、軍団の指揮を通じて信頼できる従者を得る。軍団兵士の人心を掌握して戦功を挙げる、戦功を挙げることに よつて兵士を掌握する。……

循環論はアレクシオス・コムネノスの成功にも見られる。著者によれば、アレクシオスが皇帝に選ばれた理由は、何よりも軍隊の世論だという。軍団を指揮し、兵士たちとの深い信頼関係を築いたからだ、と。すなわち、アレクシオス・コムネノスが最終的な勝利者になった理由は、コムネノス家が政権中枢にあり、中央政府の軍事的権限を掌握していたからというわけである。やはり循環論である。この循環を断ち切ろうとすれば、著者の視点と方法からは、アレクシオスの才覚を持ち出す他はなさそうである。実際、そのように読める記述もみられる。

いくつかの例を挙げて、著者の議論は循環論に、さらには英雄

史観に陥りかねないと批判したが、どうやら著者はあえて循環論を取り入れてある節がある。歴史の展開を、原因と結果が入れ替りつつ螺旋状に進むものと理解し、その過程をできる限り詳しく描き出すことをみずからの課題としているようである。

推測に推測を重ねるなら、著者のこのような歴史観が、本書に終章がない理由かもしれない。第一〇章の「結びにかえて」は本書全体の総括を兼ねるとされが、実際にはアレクシオス一世時代を扱った八〇―一〇章のまとめである。その結果、たとえばイサキオス一世やコンスタンティノス十世時代の転換期としての意義、より広くは、バシレイオス二世（九七六―一〇二五）からアレクシオス一世への変化の全体像は直接には示されない。十一世紀後半の複雑な政治過程を著者がどのように総括するのか、期待していた読者には物足りないが、著者は意図的に総括を避けたのではないだろうか。政治過程の緻密な分析・考察が、社会構造論・国家論といった抽象的な議論に吸収されることを拒否しているかのようである。

おわりに

十一世紀後半の複雑な政治過程をこれだけ見事にまとめた著作は国際的にも見当たらない。しかも本書は単なる専門書ではない。本書を読み終えた時、人間がこのように行動し、そして歴史は動くのかという感慨を抱いた。優れた歴史書のみが与えてくれる感動といつてよい。いわゆる「戦後歴史学」——「社会のしくみを明らかにしよう」という歴史学」と定義したい——の末尾にいた私にも、視点や方法論は異なっても、「社会のなかの人間を明らか

にしようとする「新しい歴史学——「社会史」と総称されてきた——の意義がよくわかった。人的ネットワークという視点を徹底的に追求したことによって、著者の新しい政治史はひとつの世界を描き切ったからであろう。本書が多くの読者をもつことを期待して擱筆したい。

(A5判 v + 四七五 + 四〇頁 二〇二二年二月)

世界思想社 七〇〇〇円 + 税)

(大阪市立大学名誉教授)